

野 口 遺 跡

第 6 次発掘調査

久留米市山川野口町所在遺跡の調査

久留米市文化財調査報告書 第75集

1 9 9 2

久留米市教育委員会

野口遺跡

第6次発掘調査

序 文

野口遺跡は、昭和54年度に国道210号線のバイパス建設に伴う発掘調査によって、縄文時代の居住地であった痕跡が発見されています。特に、野口遺跡の標識ともなる土器の出土で、縄文時代前期の文化を知る上で貴重な資料を提供しています。

今回の野口遺跡第6次調査は、過去の調査で得た知見を基に実施した結果、遺跡の状況を把握する新たな資料を得ることができました。

発掘調査の記録としては決して満足できるものではありませんが、本報告書が、文化財愛護の普及、学校教育・学術研究の資料として、広く活用いただければ幸いに存じます。

調査に当たり、ご配慮をいただきました[]氏をはじめとして、関係各位に対し衷心より謝意を表します。

平成4年9月30日

久留米市教育委員会
教育長 桑野 善吾

例 言

1. この報告書は、個人の店舗建設に伴う、久留米市山川野口町所在の野口遺跡第6次発掘調査の報告書である。
2. 野口遺跡第6次調査は[]氏の委託を受け、久留米市教育委員会が実施した。調査は文化庁文化財保護課の園井正隆が担当した。
3. 掲載した遺構の図面の実測は園井が監修し、古殿孝子・檜原初美・田中樹子・渡辺しげ子・丸山博子の協力を得、製図は足立知美が行った。また、遺物の実測、及び遺構・遺物の写真撮影は園井・角佳子が行った。空中写真は「空中写真企画」による。
4. 本書の執筆・編集は園井が担当した。

本文目次

I はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 発掘調査の概要	5
IV 縄文時代の遺構と遺物	9
1 検出遺構	9
2 出土遺物	10
V 歴史時代の遺構と遺物	14
1 検出遺構	14
2 出土遺物	17
VI おわりに	22

挿図目次

第1図 遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図 野口遺跡周辺地形および調査地点位置図 (1/5,000)	7
第3図 野口遺跡第6次調査トレンチ位置図 (1/400)	8
第4図 調査区土層断面模式図 (1/40)	9
第5図 縄文土器・石器出土地点分布図 (1/40)	11
第6図 D区出土縄文土器実測図 (1/3)	12
第7図 D区出土石器実測図 (1/3)	13
第8図 A・B区遺構配置図 (1/200)	折込
第9図 A区SK3実測図 (1/40)	15
第10図 A区SK4実測図 (1/40)	16
第11図 A区SK8実測図 (1/40)	16
第12図 A区SK11実測図 (1/40)	17
第13図 A区SK13実測図 (1/40)	18

第14図	A区SK15実測図 (1/40)	19
第15図	A区出土遺物実測図 (1/3)	19
第16図	A・B区出土縄文土器実測図 (1/3)	20
第17図	A・B区出土石器実測図 (1/3)	21

図版目次

図版1 野口遺跡調査区全景 (気球写真・東上空から)

図版2(1) C区全景 (気球写真・西上空から)

(2) D区全景 (気球写真・北上空から)

図版3 D区出土縄文土器①

図版4 D区出土縄文土器②

図版5 D区出土縄文土器③

図版6 D区出土縄文土器④

図版7 D区出土石器

図版8(1) A区全景 (気球写真・北上空から)

(2) B区全景 (南から)

図版9(1) SD1・2 (西から)

(2) SK4 (東から)

図版10(1) SK3 (西から)

(2) SK6 (西から)

図版11(1) SK13 (北から)

(2) SK15 (北から)

図版12(1) SK15高杯出土状態 (北西から)

(2) SP9石斧出土状態 (北から)

図版13 A区出土遺物

図版14 A・B区出土縄文土器①

図版15 A・B区出土縄文土器②

図版16 A・B区出土石器

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成3年に[]氏から久留米市教育委員会文化財保護課に対して、山川野口町12-20における店舗建設に基づく、埋蔵文化財包蔵地の確認調査の依頼があった。この申請を受けて、当該地周辺について過去に確認調査および発掘調査を行った結果から判断して、埋蔵文化財包蔵地であり、野口遺跡として周知されていることを、確認調査の回答として伝えた。その後、数度の協議を行い、平成4年3月に法第57条の2による「埋蔵文化財発掘の届出」が提出されたのを受け、平成4年4月から調査を実施する運びとなった。

埋蔵文化財発掘調査費については原因者負担とし、平成4年4月3日に久留米市長谷口久は[]氏と、野口遺跡第6次発掘調査に係る「委託契約書」を取り交わした。

当該地は、昭和53年度に東部土地地区画整理事業に伴う換地部分のトレンチ調査を行った地点である。今回の開発における建造物の位置が、先の調査トレンチの部分と異なるため、基礎工事で掘削する箇所を調査対象地とし、その他の箇所については地下の文化財に直接影響を与えないことで保存調整の協議を行った。

2 調査の組織

調査委託	[]
調査主体	久留米市教育委員会 教育長 桑野善吾
調査総括	文化財保護課長 古賀幸男 文化財保護課主査（埋蔵文化財） 萩原裕房
事務担当	渡辺善治・平田義弘
調査担当	園井正隆
調査作業	荒木峯子・高木昌子・大石久枝・大石マサコ・大塚チズ子・緒方サナミ・緒方ヨシ子・財本美智子・田中樹子・田中レイ子・檜原初美・原口キヨカ・原口タツエ・古殿孝子・山崎キヌ子・吉田峰子・渡辺しげ子・丸山博子・小屋松智・姫野健太郎
整理作業	足立知美・野口和子・角 佳子・秋永まり子・川島美雪

II 遺跡の位置と環境

福岡県南部に位置する久留米市は、阿蘇外輪山に水源を有する筑後川と肥沃な水田地帯が広がる筑紫平野、および古生代の変性岩を基盤とする耳納山地を有する。

野口遺跡は久留米市の北東部に当たり、耳納山地北西端に位置する高良山(312m)を南に仰ぎ、筑後川中流左岸に形成された自然堤防上に立地する。標高は9～10mを測る。調査地は周囲の水田面との比高差が約1～2mあり、明治時代に土を盛られたとの事である。

以下、野口遺跡の周辺に存在する主要な遺跡の概要を紹介する。なお、遺跡名冒頭の番号は第1図に示す分布図の番号と一致する。

1. 神道遺跡

中谷川の東に広がる遺跡で、低位段丘の基部に位置する。奈良～鎌倉時代の遺構が多数検出された。竪穴住居から掘立柱建物へ変遷する様子が窺える興味深い遺跡である。また、一土壌から約380点もの遺物が出土し、器種も多種多様である。ヘボノ木遺跡と対比すると遺跡の性格に差異が見られる。一般的な集落の性格を表している。

2. ヘボノ木遺跡

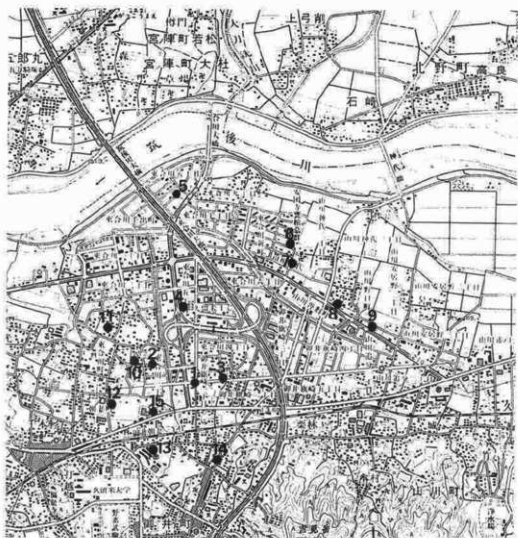
中谷川と井田川に挟まれた低位段丘の基部に位置し、神道遺跡に西隣する。標高13～14mを測る。縄文～鎌倉時代の大規模な複合遺跡である。奈良～平安時代前期の遺構には7間(19m)×4間(12m)の四面に廂を持ち、2度の建て替えを行う掘立柱建物を中心に、回廊を付す特殊な施設が検出されている。特殊な遺物が多いことから、御井郡の官衙跡と想定されてきたが、最近、寺院跡の可能性が強くなっている。また、縄文時代早～晩期の土器・石器、弥生時代中期の集落や、鎌倉時代の遺構も検出されている。

3. 御堂島遺跡

高良山から北西に延びる低平な台地の北端部に位置し、緩やかに北方の筑後川へ向って傾斜する。標高は10～11mを測る。奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物・櫓列・溝などが検出され、また、墨書土器・刻書土器・転用硯などの遺物も出土している。

4. 下見遺跡

標高8～9mの低位段丘の先端に広がる遺跡である。現在、九州縦貫自動車道久留米インターチェンジの北側に当たる。奈良～江戸時代にかけての集落跡であると報告されている。奈良時代の遺構の状態から律令制度におけるムラの様子が窺える。また、鎌倉～室町時代の建物の跡から在地豪族の屋敷跡と推定される遺跡である。遺物についても数多くの興味深い資料を提供している。



第1図 遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|---------|----------|----------|---------|
| 1 神道遺跡 | 2 ヘボノ木遺跡 | 3 御堂島遺跡 | 4 下見遺跡 |
| 5 新府遺跡 | 6 安国寺遺跡 | 7 松ヶ本遺跡 | 8 野口遺跡 |
| 9 大島遺跡 | 10 水洗遺跡 | 11 西小路遺跡 | 12 朝妻遺跡 |
| 13 横道遺跡 | 14 二本木遺跡 | 15 山下遺跡 | |

5. 新府遺跡

筑後川左岸の微高地上に立地する。昭和55年の調査によって、阿高式系土器・突帯文土器が出土、また、朝鮮式磨製石鏃・偏平片刃の小形石斧なども出土し、縄文時代中期末～晩期、弥生時代前期～中期に至る遺跡と考えられる。

6. 安国寺遺跡（安国寺甕棺墓群）

筑後川に面した自然堤防状の微高地に立地し、野口遺跡の北西300mに位置する。安国寺遺跡からは、旧石器時代・縄文時代早期～晩期に及ぶ遺物が多数出土しており、筑後地方における縄文文化の把握に重要な知見を提供している。安国寺甕棺墓群は昭和53・54年の2カ年にわたる調査の結果、甕棺墓と祭祀土壇、それに伴う丹塗りの土器が多く出土し、弥生時代中期中葉後半を中心とした甕棺墓群の様相が明らかになった。

7. 松ヶ本遺跡

安国寺遺跡に南隣する遺跡で、縄文時代～中世にかけての遺構・遺物が検出されている。縄文時代においては、安国寺遺跡と同様な性格である。弥生時代以降から性格を異にする様子が窺える。今後、遺跡の性格をさらに追求しなければならない遺跡である。

9. 大島遺跡

野口遺跡の東300mに位置し、江戸時代に久留米藩士矢野一貞が著した『筑後将士軍談』の中で「銅矛」が出土した推定地とされている。旧状は「一円丘有り」と記されているように微高地をなしていたと思われるが、現在はその面影もなくなっている。

10. 水洗遺跡

ヘボノ木遺跡の西端にあり、朝妻清水を水源とする井田川が遺跡の西側を流れる。標高は約12～13mで、低台地の縁辺に立地する。縄文時代前期の遺物が多数出土しており、野口遺跡に相応する遺跡として注目される。奈良～平安時代の遺構はヘボノ木遺跡の広がりとみられる。

11. 西小路遺跡

ヘボノ木遺跡が立地する低位台地の先端に位置する。以前、弥生時代中期の甕棺墓・石蓋土壇墓が検出され、俄かに注目された遺跡である。最近の調査では弥生時代の遺構は少なく、縄文時代後期の土器・歴史時代の遺構・江戸時代中期の溝などが検出されている。

12. 朝妻遺跡

低位段丘の基部に位置し、ヘボノ木遺跡とは井田川を挟んで対峙する。10世紀中頃～11世紀後半代の掘立柱建物が多く検出され、官衙を構成する建物群と考えられることから、国衙の移転に伴う第3期国衙跡と目されている。近年、それを立証すべき大規模な掘立柱建物が検出された。

13. 横道遺跡

中位段丘の北縁に立地し、現在の南筑高校の敷地を中心とする。竪穴状遺構・集石遺構が検

出され、かつ、押型文土器や撚糸文土器が出土する縄文時代早期の大遺跡である。また、平安時代中頃～鎌倉時代の掘立柱建物・溝が方位を揃えて検出され、官衙的な性格が想定されており、第4期の国衙跡と考えられている。

14. 二本木遺跡

横道遺跡の東に隣接し、標高29mの中位段丘上に位置する。弥生時代～鎌倉時代の竪穴住居・溝状遺構・方形竪穴などの遺構が検出されている。特に、鎌倉時代の土師器・瓦器・輸入陶磁器が多数出土し、「高良信仰」の影響で集落は広範囲に及ぶと考えられる。

15. 山下遺跡

この遺跡はヘボノ木遺跡・朝妻遺跡・横道遺跡・神道遺跡に囲まれており、低位段丘の基部に位置する。それぞれの遺跡に各時期で相応する遺構・遺物が出土している。7世紀後半の溝は水源を朝妻清水に求め、集落の生活用水としての水路であったと考えられる。

III 発掘調査の概要

調査対象地において、店舗建設に伴い掘削工事を行う箇所に調査トレンチを設定した。A・B区については、掘削の深さが浅いことから、歴史時代の遺構の検出に重点を置き、C・D区では地山より更に深く掘削されるため、縄文時代の遺構検出・遺物出土状態を把握することを目的とした。(第2図・図版1)

発掘調査は平成4年4月6日から開始し、天候に左右されながらも5月7日をもって現地での調査を終了した。また、出土遺物の量が多いことから、4月16日より整理作業に取りかかり、9月30日をもって、調査を完了した。

以下、調査日誌に基づき、発掘調査の経過を記す。

平成4年4月6日

太陽建設より提出された計画位置図を基に、4箇所の調査区を設定し、A区から重機による表土剥ぎを開始する。それと並行してテントの設置、および、機材の搬入を行う。

4月7日

A区の遺構検出を始める。遺構の埋土は黒褐色・灰茶色・茶褐色の3種の色調に別れる。



重機による表土剥ぎ風景

4月8日

A区の表土剥ぎを終了する。座標および標高を調査区内に移動させる。A区の遺構検出後、遺構の平板測量を始める。

4月9日

B～D区の表土剥ぎを終える。D区では以前調査したトレンチを確認できと思っていたが、僅かに位置がずれていた。

4月13日

A区の平板測量・遺構実測用の割り付けを終了する。遺構発掘を北側から始める。遺構の埋土の下層には縄文土器を包含する黒色の層が見られる。

4月16日

A区の遺構配置図を1/20で作成する。土師器の高杯脚部が出土する。出土遺物の水洗を開始する。

4月17日

遺物出土状態の写真撮影を行う。遺構の実測図を終えた図面から逐次エレベーションを開始する。

4月20日

B区の遺構検出を行い、発掘作業に入る。D区の調査に入る為、作業員を2班に分けて黒色の層を1枚ずつ剥いでいく。

4月22日

A～D区のトレンチ位置図を平板測量で作成する。

4月23日

A区の遺構実測・エレベーションを終了する。B区の遺構完掘状態の写真撮影を終え、実測用の割り付けを行う。C区の調査を始めたが、新しい時期に攪乱を受けており、縄文時代の包含層の残存状態は良くない。D区では石器・縄文土器が多数出土した。

4月27日

写真撮影の為、A区内を清掃する。個別遺構の写真撮影を行う。B区は遺構実測に取りかかる。C・D区はさらに掘り下げを行う。



平板測量風景



エレベーション風景



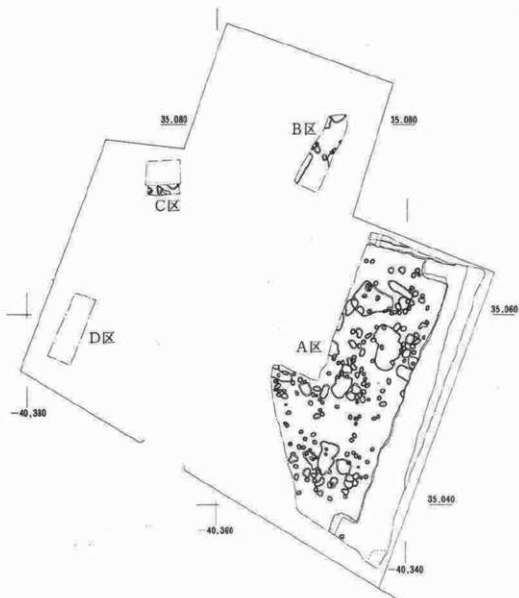
第2図 野口通跡周辺地形および調査地点位置図 (1/5,000)

5月2日

A・B区内の清掃を行い、個別遺構を撮影する。

5月7日

空中写真撮影を行う。強風のため困難な撮影であったが、どうにか終了する。機材・テントを搬出し、本日をもって現地における発掘調査を無事終了する。



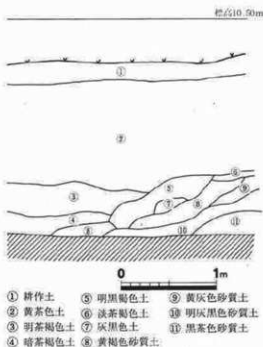
第3図 野口遺跡第6次調査トレンチ位置図 (1/400)

IV 縄文時代の遺構と遺物

1 検出遺構

縄文時代の調査トレンチは、C区が南北7m・東西7.5m、D区を南北15m・東西5mに設定した(第3図・図版2)。C区の北側は後世に攪乱を受けているため、南半部のみ中世の遺構を検出した後、縄文時代の層の発掘に入った。また、D区においても攪乱を受けており、黒色土を検出した後に、トレンチに添って南北に基準を設けて、2～3cmの深さで1段ずつ包含層を剥いでいった。

野口遺跡の標準土層は、第2～5次調査の報文でも述べているが(註1)、今回の調査では遅く攪乱の箇所にトレンチを設定したため、各トレンチの土層を全て示せ得なかった。ここに示した土層は、攪乱の状態が極めて少なかったB区の土層である(第4図)。第6次調査の標準土層とは言えない層序を成しているが、野口遺跡の旧地形を窺うことのできる層序である。



第4図 調査区土層断面模式図(1/40)

①は耕作土である。

②は地権者の話では盛土を行ったのが、半世紀前とのことである。

③は明茶褐色土で、遺物の包蔵が認められない。厚さは25～30cmを測る。

④は暗茶褐色土で、未切り離しの底部を持つ土師器小皿片・青磁碗片が出土している。

⑤は明黒褐色土で、20～30cmの厚さで堆積している。磨滅した土師器の細片を包蔵する。

⑥は淡茶褐色土で、約7cmの層をなす。

⑦は灰黒色土で、⑤の堆積の際にブロック状に混入した層であろう。

⑧は黄褐色砂質土で、無遺物層である。従前調査で検出されなかった層である。

⑨は黄灰色砂質土で、⑧よりやや灰色を呈する。土質は極めて似ている。

⑩は明灰黒色砂質土で、縄文後期の遺物包含層である。15～20cmの厚さである。

⑪は黒色砂質土で、30cm以上堆積した層である。縄文前期の遺物包含層である。

今回設定したトレンチの各所でこのような層序が見られる訳ではないが、⑩・⑪の層が検出される面は、B区からA区に向かって20cm程下がり、D区からA区に向かって40cm程標高を落としている。

D区における縄文土器・石器の出土地点の分布図（第5図）でも南側に向かうにつれて、遺物の出土する面の標高が下がっているのが判る。

2 出土遺物（第6・7図、図版3～7）

C区の⑩層から数片の縄文土器が出土している。D区においても遺物は全て⑩の層から出土したものである。縄文土器については縄文前期のものが殆どであった。ここに紹介する資料は時間の都合上、出土遺物109点の内、実測に耐え得る18点に絞った。

1～10は沈線文を主体とした一群である。文様の形態から4タイプに分類できる。

a類は平行直線文と連続する弧線文を組み合わせたもの。（1・3・6）

b類は口縁部に隆帯文を有し、直線文と弧線文を組み合わせたもの（4）

c類は平行直線文を数条施文したものの。（2・5・7・8・10）

d類は平行横線と平行斜線を組み合わせたもの。（9）

以上4タイプに分類した文様構成を持つ土器は、野口式土器（註2）と呼ばれるもので、轟B式土器と曾畑式土器の中間に位置する。図示した資料について説明を加えたい。

a類

1は直立する口縁部で、内面にはアナダラ条痕文をナデ消し、口縁端部に指頭圧痕が見られる。3は内面に条痕文が明瞭に残る。6は条痕文を施した後ナデ消している。

b類

4は口縁部と平行した隆帯文の下の部分に弧線を充填文様として配している。直立した口縁部である。

c類

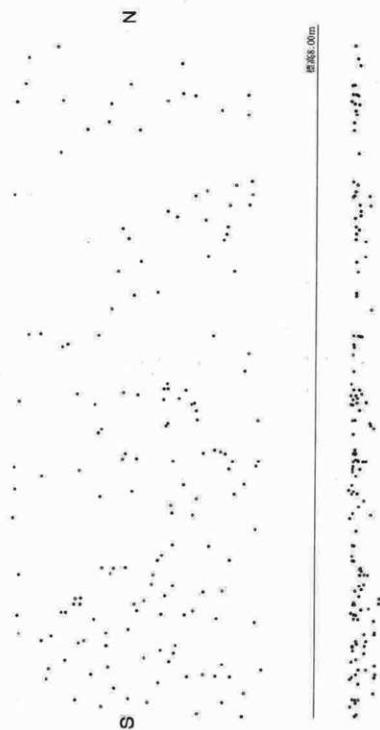
2・5・7・8は内面にアナダラ条痕文を認めることができる。10の内面には条痕文をナデ消した様子が窺える。孰れも細片の資料であるため、a類の範疇に入るものが混同している可能性もあろう。

d類

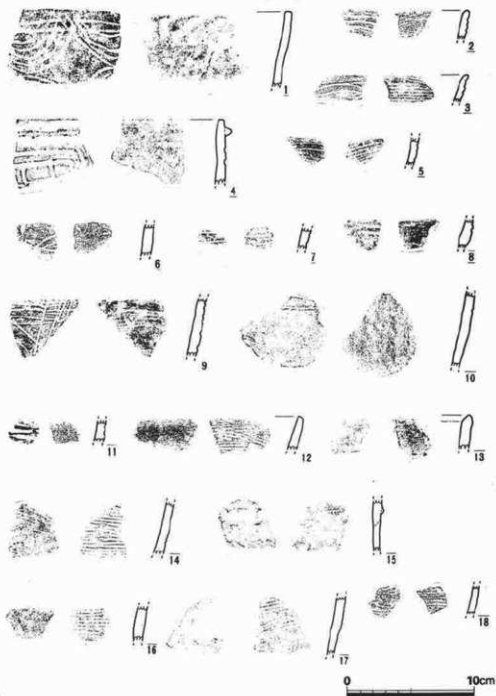
9は内面下方の条痕文をナデ消され、上方のみ残っている。

11は曾畑式土器である。胎土に多量の滑石粉末が混入する。

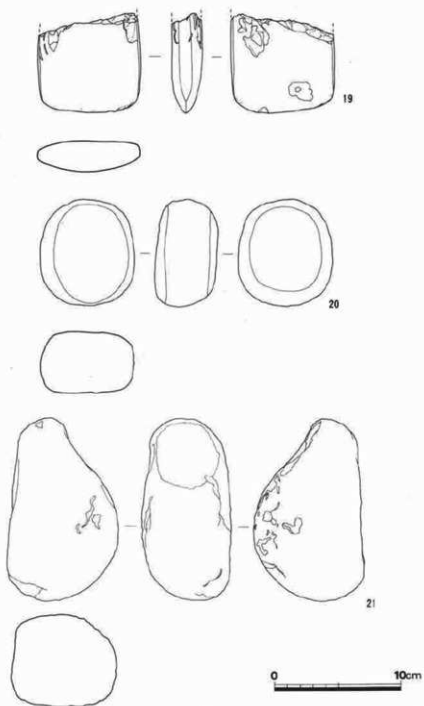
12～18は無文土器である。12の体部に穿孔を見る。14・17・18には器面に僅かながら条痕文が窺えられるが、ナデ消した痕跡が認められる。また、内面にもアナダラ条痕文が施されている。15の内面は条痕文が判別できないほどナデ消している。



第5圖 縄文土器・石器出土地点分布図(1/40)



第6图 D区出土绳文土器实测图(1/3)



第7图 D区出土石器实测图(1/3)

石 器

D区から41点の石器が出土している。黒曜石の剥片が大半を占める。以下に紹介する石器は使用痕を有するもので、剥片の図示及び説明は敢えて外した。

19は蛇紋岩製の磨製石斧である。中位から頭部を欠損する。刃部の両面に使用痕が残り、一部に刃こぼれが認められる。

20は敲石である。石材は安山岩で円礫を使用し、礫の全周を敲石に使っている。

21も安山岩の円礫を磨石として使ったものである。礫の3面に磨り面が認められる。

V 歴史時代の遺構と遺物

1 検出遺構

歴史時代の遺構は、縄文時代の包含層の上に乗っており、遺構検出面は茶褐色砂質土を呈している。遺構の底面の目安が黒色土である為、発掘作業は比較的早く進行することができた。

A区およびB区の調査によって、溝2条・土壇12基・ピット多数を検出した。

A区の遺構検出面は北西端が最も高く、東・南へ向かって標高を下げる。調査区全域から遺構は検出された。B区は北半部に遺構が集中して検出され、南へ向かって緩やかに落ちる様子が窺える。以下、遺構について説明を加えたい。(第8図、図版8)

溝

SD 1 〈A区〉(図版9)

調査区の北西隅に位置する。南北走行の溝である。南岸の確認は行えたが、北岸は調査区外にあり、溝幅を知り得るに至らなかった。検出幅は70cmを越える。現存深さは4cmと浅い。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は殆ど出土していない。

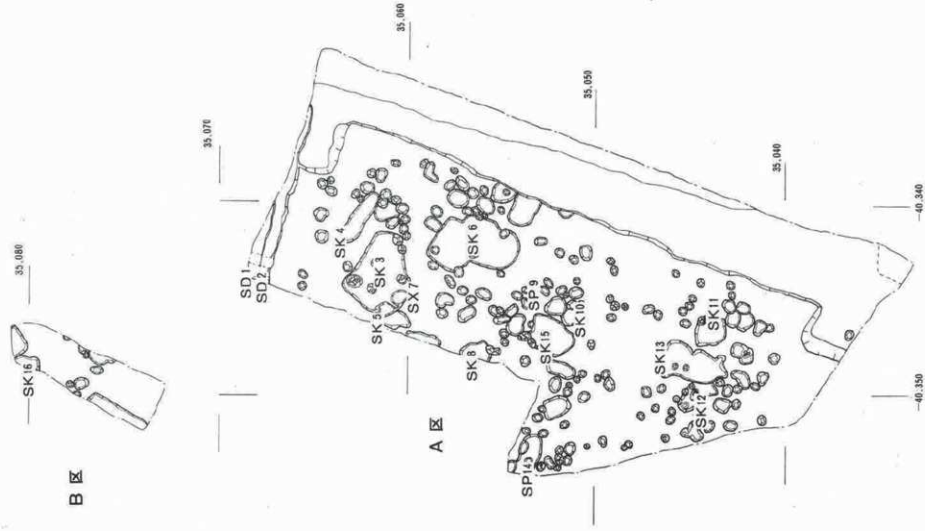
SD 2 〈A区〉(図版9)

SD 1と重なるように検出された溝で、南北走行を呈する。SD 1に切られるため、溝幅は判然としなない。茶褐色の埋土を有する。検出幅は50～75cmで、現存深さは20～25cmを測る。糸切り離しの底を持つ土師器の小皿が出土しており、12世紀代には溝としての機能が廃絶したと考えられる。

土 壇

SK 3 〈A区〉(第9図、図版10)

調査区の北側に検出した。台形状を呈する土壇である。長軸425cm・短軸330cm・現存深さ20cmを測る。壇底面はフラットを呈している。SK 5を切っている。土師器の杯・小皿が出土する。いづれも糸切り離しの手法を持つ底部が認められる。



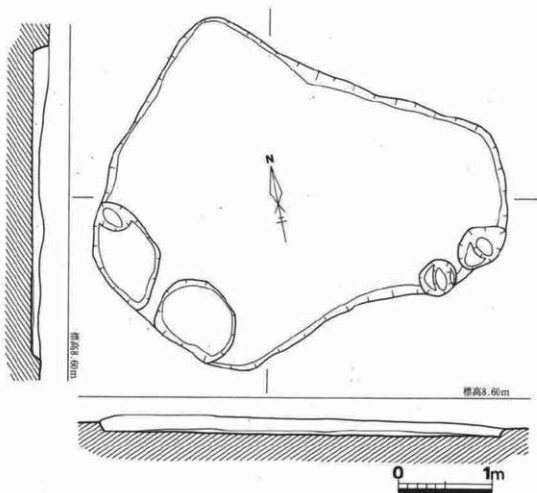
第 2 図 A・B 区遺構配置図 (1/200)

SK 4 〈A区〉(第10図、図版9)

SK 3の北東に隣接した位置で検出した土壌である。細長い長方形のプランをなす。主軸の方位はN-56°-Wを示す。長軸308cm・短軸77cmを測る。現存深さは18cmである。墳底はやや傾斜するものの平坦面を保つ。土師器の細片が一片出土した。

SK 5 〈A区〉

SK 3に切られた土壌である。平面プランは不整形を呈する。長軸214cm・短軸101cm・現存深さ14cmを測る。N-20°30'-Eに主軸を持つ。古墳時代前期の甕が3個体程出土している。



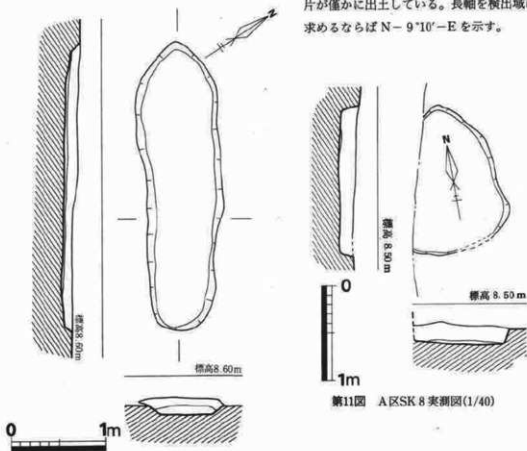
第9図 A区SK 3実測図(1/40)

SK 6 〈A区〉(図版10)

調査区の中央やや北に位置する土墳である。平面形は不整形であるが、二つの土墳が重なったものであろう。遺構検出および遺構発掘の際、切り合い関係を注意して行ったが、埋土の色調・土質に差異が認められなかった。また、出土遺物も極めて少ないことから、一土墳として取り上げることにした。現存深さは10cmで浅く、墳底面は僅かに波打つような様相を呈する程で平坦に近い。

SK 8 〈A区〉(第11図)

調査区中央東端で遺構の一部を検出した。平面プランは判然としない。現存深さは13~20cmで、壁は直に立ち上がりを見せる。墳底面はほぼ平坦である。茶褐色の埋土からは土師器の細片が僅かに出土している。長軸を検出域に求めるならばN-9°10'-Eを示す。



第10図 A区SK 4実測図(1/40)

第11図 A区SK 8実測図(1/40)

SK11 (第12図)

調査区の南側東寄りで検出した。平面形は台形を呈する。短辺100cm・長辺170cm・現存深さ

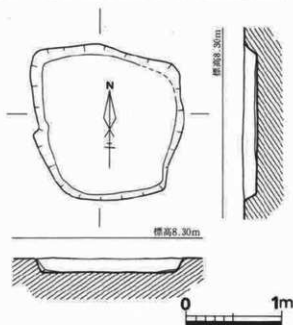
15cmを測る。平坦な墳底面を有する。墳底面はフラットを呈する。遺物は縄文土器片と木炭片が出土している。

SK12

SK11の東に位置する土壌で、SK13に切られる。楕円形のプランを呈する。長軸230cm以上・短軸110cmで、現存深さ10cmを測る。墳底面はややU字形をなし、縄文土器細片・黒曜石の剥片が出土している。

SK13 (第13図、図版11)

調査区南側の中央付近で検出した。SK11とSK12に挟まれており、不整形の平面プランを有する。SK 6と同様に、複数の土壌が重なり合って不整形をなしている可能性がある。ここで一土壌として扱ったのは、底面の状態に変化が見られなかったことに起因する。長軸360cm・短軸



第12図 A区SK11実測図(1/40)

土している。

SK16

B区北端で検出した。調査区内には土壌の一部しかかかっておらず、平面形は判らない。現存深さは20cmを測り得た。墳底面はほぼ平坦である。土器器腕片が出土している。

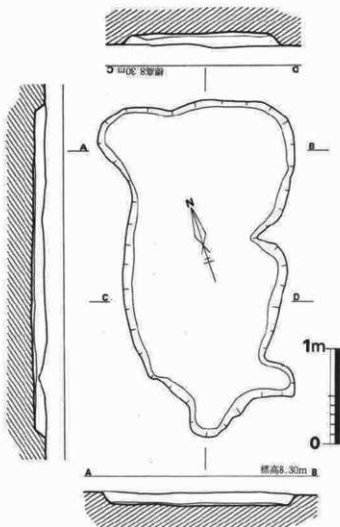
2 出土遺物 (第15～17図、図版13～16)

A・B区から出土した歴史時代の遺物は予測していた程多くなく、土師器の小皿・杯・甕など

140～210cmの規模を持つ。現存深さは15cm前後で、平坦な面が広がる。N-17°45'-Eに主軸方位を示す。遺構に伴う遺物は出土していない。遺構の下層に広がる縄文時代の黒色土層から縄文土器片・黒曜石剥片が出土している。

SK15 (第14図、図版11・12)

調査区のほぼ中央部に位置する土壌である。赤褐色を帯びた埋土であったため、地山との判別に惑わされた。平面形は略長方形をなす。長軸230cm・短軸165cmで、現存深さ約10cmを測る。出土遺物は土師器の高杯・碗・甕である。特に、甕は4個体分がまとまって出



第13図 A区SK13実測図(1/40)

復元口径16.4cmを測る。長石・雲母粒を多く含んだ胎土である。外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。

SK10出土遺物

23は土師器の高杯で、杯部・裾部を欠損し、脚部のみが残存する。杯部との取り付け部分を水平に置くと、脚部の広がりには均等さを失う。また、脚部の中位に3カ所穿孔が認められる。これも穿孔の位置、孔径は不揃いである。孔径は0.9～1.1cmを測る。柱部内側にも穿孔に用いられた棒状の器具を差し込んだ様相が窺えられる。胎土は精製された粘土である。

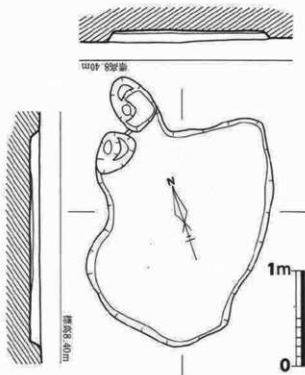
この高杯と共伴する土器に二重口縁を持つ壺がある。口縁部上段と下段の境に突帯状の粘土

が見られるが、殆どが細片であり、実測に耐え得るものではなかった。小皿・杯は底部に糸切り離し手法の痕跡を持つものが圧倒的に多く、ヘラ切り離しの底部を有するものは少なかった。

以下に述べる遺物はSK5・SK10から出土したものである。共伴する遺物も細片であるが、それぞれ同時期の遺物である。

SK5出土遺物

22は胴部以下を欠損する土師器の甕である。口縁部はコの字型を呈し平坦に仕上げ、内側をややつまみ上げている。頸部から口縁部にかけては直線的に開く。器面の外側の調整は頸部から胴部に至っては縦方向のハケ目調整の痕跡が窺える。また、内側にはヘラケズリを施している。全体的に薄い器内に仕上げられている。



第14図 SK15実測図(1/40)

色の色調を持ち、後者は黄褐色を呈する。

歴史時代の遺物に混じって、その下層に包蔵されていた縄文土器・石器が出土している。土器では縄文前期～晩期のものが見られ、D区の出土遺物と時期に差異が生じる。後世の遺構の埋土に流れ込んだのであろう。以下、説明を加えることにする。

SK 3 出土遺物

26は胴部に3条の貼付け隆帯を有する土器で直立する口縁を持つ。内面にアナグラ条痕文を付す。轟B式土器に相当する。

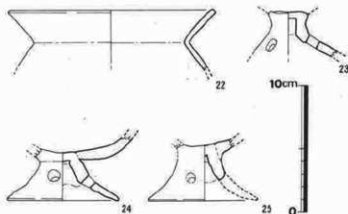
27は弧線文を有する野口式土器である。

SK 6 出土遺物

が残存するが、接合できないため掲載を差し控えた。内外面にハケ目調整を施している。

SK15出土遺物

24・25は共に土師器の高杯である。杯部を欠損する資料であるが、一部残存した杯部は内湾気味に立ち上がる様子が窺える。脚部には双方とも穿孔が3カ所見られる。柱部を厚く、裾部は特に薄く仕上げている。24の柱部内側にはヘラ状器具で削った痕跡がある。裾部径は8.8cm、脚部高は3.3cmである。25は脚部を一部残しているが、磨減が著しいため、調整については不明瞭である。復元裾部径は8.8cm、脚部高は3.7cmを測る。前者は茶灰



第15図 A区出土遺物実測図(1/3)

28は口唇部を指頭で圧して刻み目とし、器面は丁寧に整えている。縄文中期の阿高式土器に相当する。

SK 8 出土遺物

29は口縁部を若干外反させており、端部内側には1条の沈線を付す。縄文晩期の浅鉢形土器であろう。

SK11出土遺物

30は縄文後期の無文土器の口縁部の資料である。口唇部は平坦に仕上げ、口唇内部に粘土の折返しが見られる。内面には条痕文が付されている。

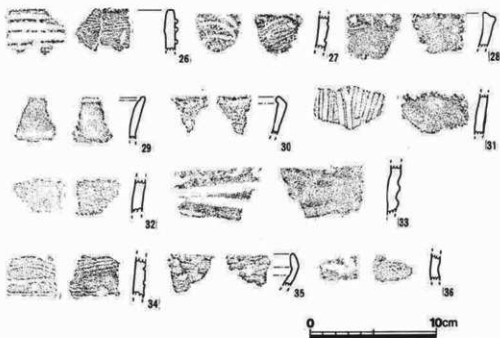
SK13出土遺物

31は縦方向に幅広い沈線文が施される。曾畑式土器に相当する。32は滑石粉末が多量に混入した無文土器である。33の施文は緩やかな斜線と鈎手文で構成されている。縄文中期の阿高式土器である。

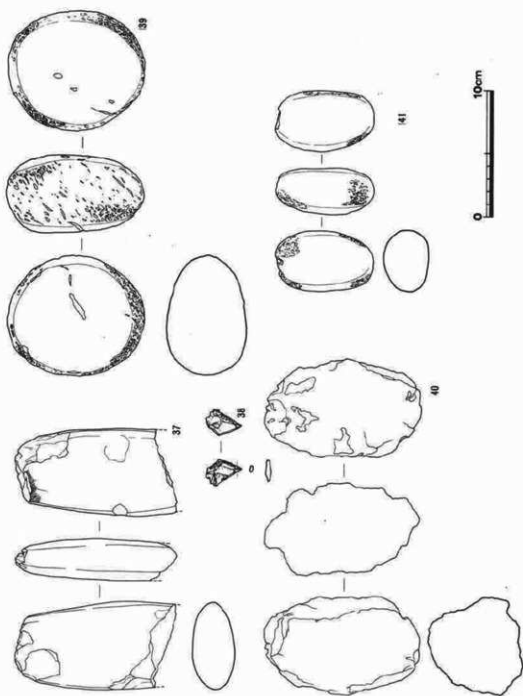
SP14出土遺物

34は平行横線と弧線文を組み合わせた野口式土器で、内面にはアナグラ条痕文を付す。

SX 7 出土遺物



第16図 A・B区出土縄文土器実測図(1/3)



第17圖 A・B区出土石器実測図(1/3)

35は内湾した口縁部を有し、内面には条痕文がわずかに残る。縄文後期の無文土器である。

包含層出土

36は渦巻状の沈線を施文した阿高式土器である。

石 器

SP 9 出土遺物 (図版12)

37は蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部を欠損する。長さ12.8cm・幅6.9cm・厚さ3.3cmを測る。

SK12出土遺物

38は黒曜石を石材とした石錐である。縦長剥片を素材とし、背面の右側辺と腹面右側辺の一部および先端部分にリクツナが加えられている。

39～41はB区①層から出土した遺物である。

39は石材に安山岩を使用し、偏平な略円形を呈している。全面を磨石として利用し、周辺に敲打痕が認められ、敲石としても使用されたものである。

40は軽石である。長さ12.3cm・幅7.1cm・厚さ7.5cmを測る。

41は安山岩を石材とした敲石である。先端部と末端部に敲打痕が看取される。

VI おわりに

野口遺跡は、昭和54年度に行われた国道210号線バイパス建設に先立つ発掘調査によって、縄文時代の遺構・遺物が多数出土し、一躍注目されるようになった。その後、5次に亘る発掘調査を行ってきたが、縄文時代の遺跡の範囲、および歴史時代の遺構の状態を各次数の調査で所見を述べる度に一步前進したかと思えば、また立ち止まると言った牛歩的な成果しか上げられていない。今回実施した第6次調査では、これまでにない成果を上げることができた。

まず、従前の調査では、野口遺跡の出土遺物の時期が縄文時代前期～晩期に亘っていると報告されている。今回の調査地点においても同様な時期の遺物出土を見た。ただ、前期と後期の遺構を伴う生活面を把握するには至らなかった。

さらに、縄文土器を包蔵する黒色土の検出面高低差から、野口遺跡の旧地形を確認し得た。本調査地点が野口遺跡の東端に当たり、筑後川の自然堤防をなす微高地の先端に位置すると判断される。

次に、古墳時代前期の高杯・甕・壺が出土したことである。このことは野口遺跡のみならずこの周辺遺跡をも含めても初例のことである。中期の生活跡とそれに伴う遺物の出土は、久留米市山川町所在の新婦遺跡で見られたが、その範囲がどこまで広がるか未解明のままである。SK10・SK15が前期の遺構となり得ると考えられ、野口遺跡のどこにこの時期の生活面が存在す

るのかを追求することが新たな課題となった。

また、歴史時代の遺構は、既調査の遺構と関連を示しておらず、単発的な結果となってしまった。この最大の原因は後世の攪乱によるものであり、今調査地点以外で新たな知見を俟ちたい。

最後に、この報告書を作成する時間的な制約があり、検出遺構・出土遺物の一覧表を作成することができなかった。発掘調査の成果を報告書に託す思いは過るばかりで、次から次へと発掘調査現場を渡り歩き、調査の成果を分析し、考察を加える十分な時間が取れない現状を理解して頂き、調査成果の紹介に留まったことをお許し願いたい。

注 釈

註1 第2次調査…「久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」

久留米市文化財調査報告書 第28集 1981 「久留米市教育委員会」

第3・4次調査…「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書」 第7集

久留米市文化財調査報告書 第30集 1987 「久留米市教育委員会」

第5次調査…「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書」 第8集

久留米市文化財調査報告書 第33集 1988 「久留米市教育委員会」

註2 「管畑式土器の出現」—東アジアにおける先史時代の交流— 水ノ江和同

『古代学研究』第117号 1988

従来、「プロト管畑」と仮称されていた土器を轟B式土器と管畑式土器の中間土器群に位置付け、野口遺跡から出土する土器群を「野口式土器」と設定している。

圖 版



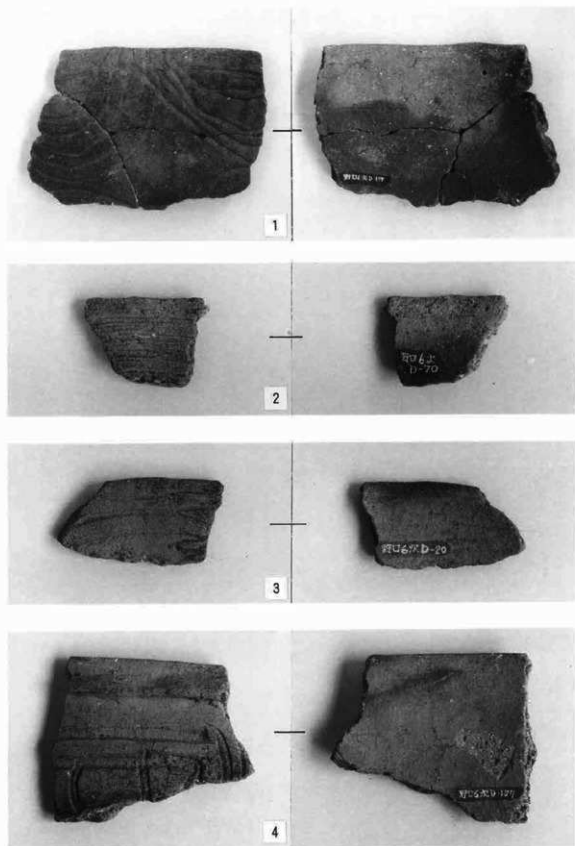
— 野口遺跡調査区全景 (気球写真・東上空から)



(2)D区全層（気球写真・北上空から）

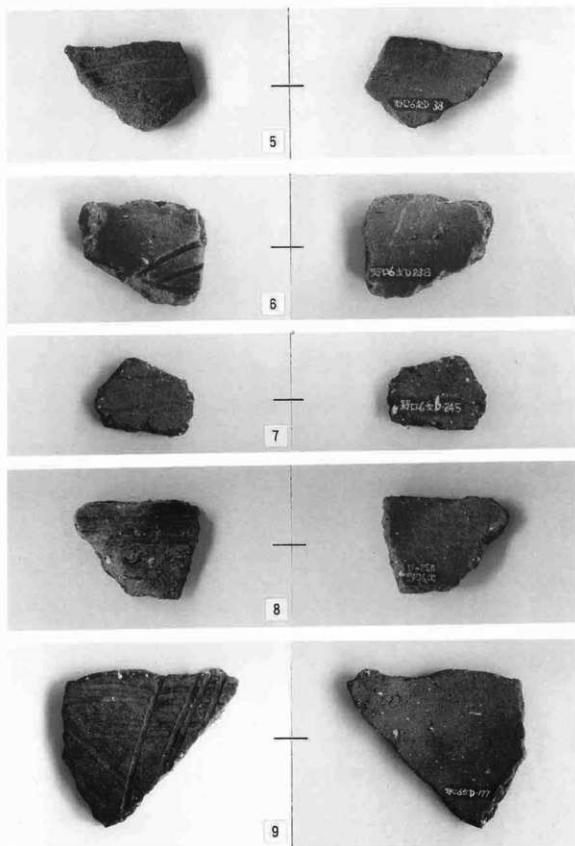


(1)C区全層（気球写真・西上空から）

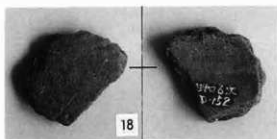
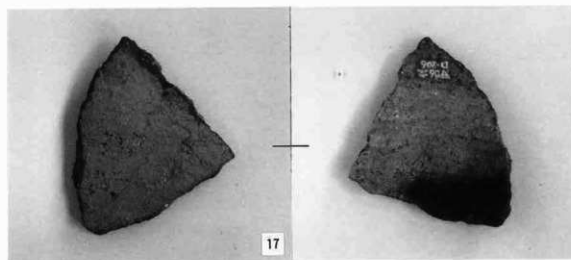
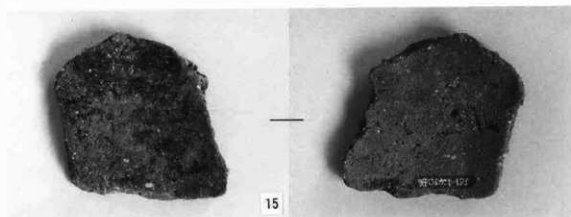


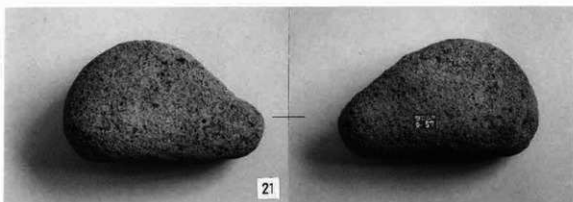
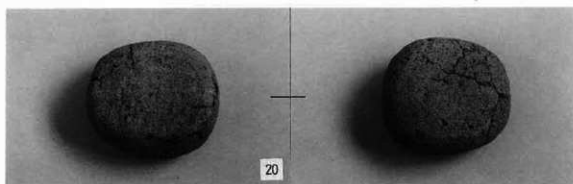
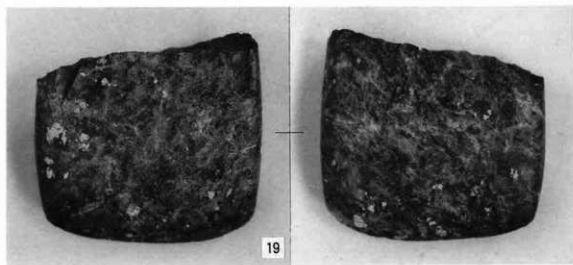
D区出土陶文土器①

图版 4



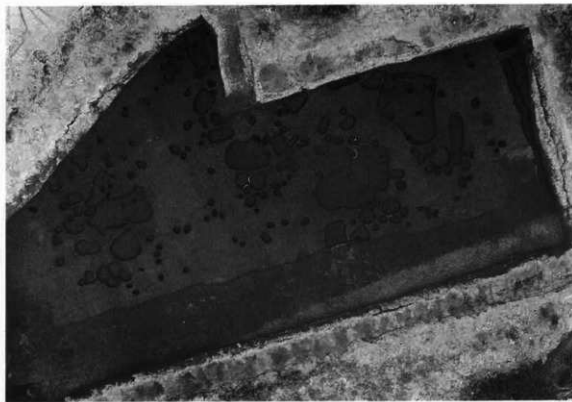
D区出土绳文土器②







(2) B区全景 (南から)



(1) A区全景 (気球写真・北上空から)



(2) SK 4 (東から)



(1) SD 1・2 (西から)



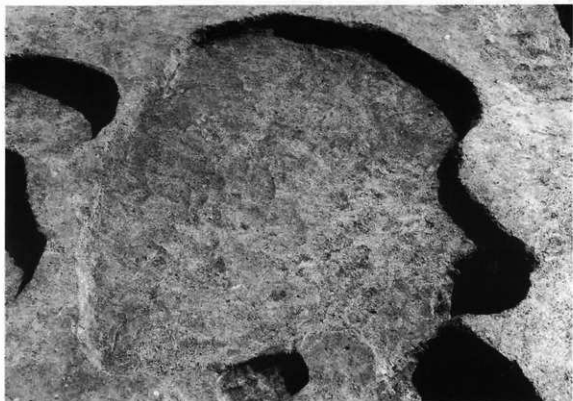
(1) SD 3 (西から)



(2) SK 6 (西から)



(1) SK13 (北から)



(2) SK15 (北から)

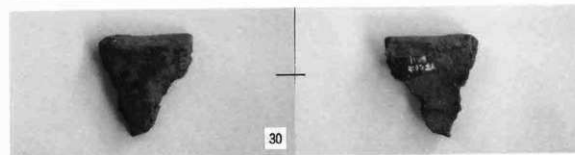
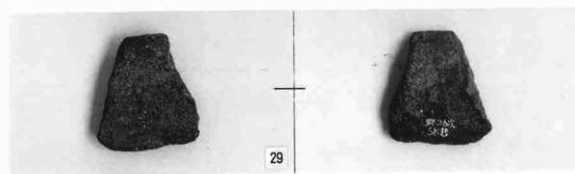
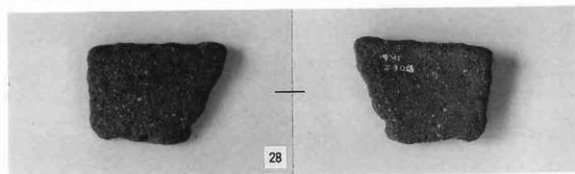
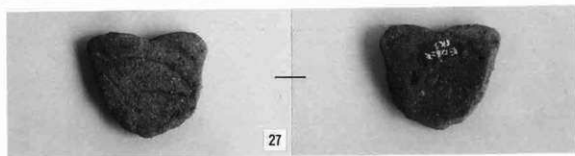
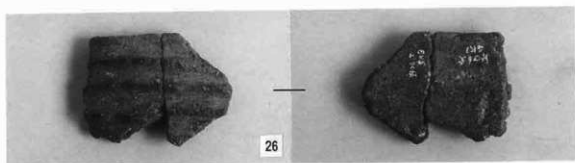


(1) S K15高杯出土状態（北西から）



(2) S P 9石斧出土状況（北から）







31



32



33



34

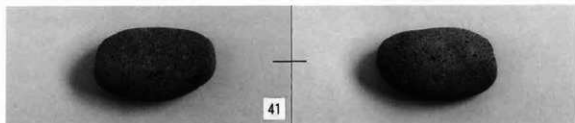
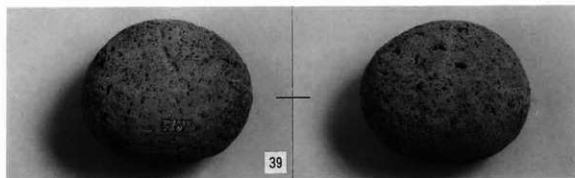
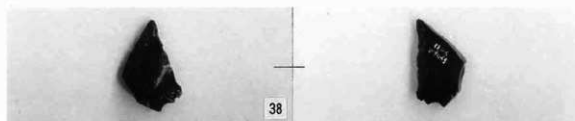
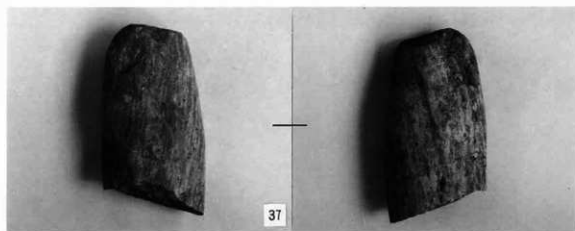


35



36





野 口 遺 跡

第6次調査

久留米市文化財調査報告書 第75集

平成4年9月30日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

編集 久留米市教育委員会

文化部文化財保護課

印刷 猪 飼 プ リ ン ト